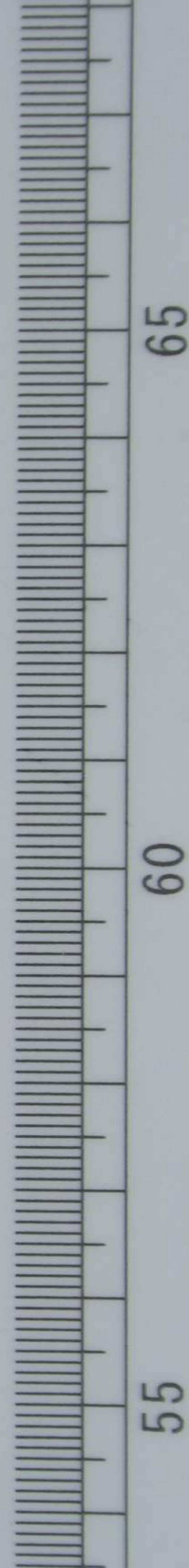
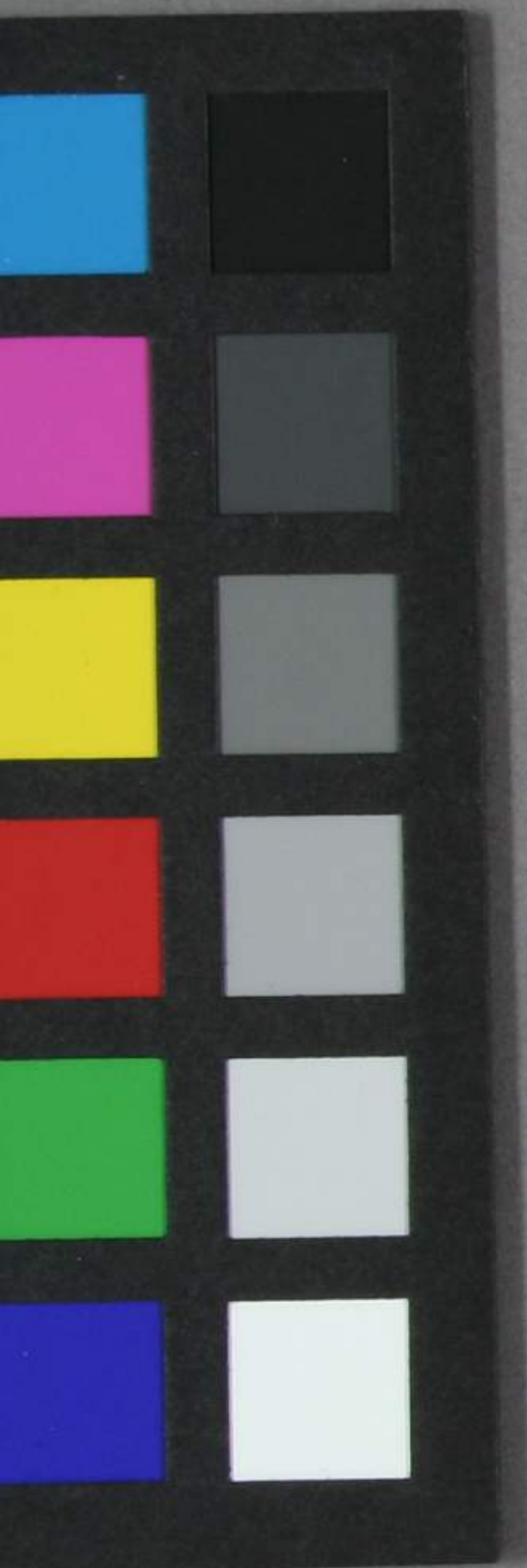


鏡幹外數人著

新體  
詩集

月の桂

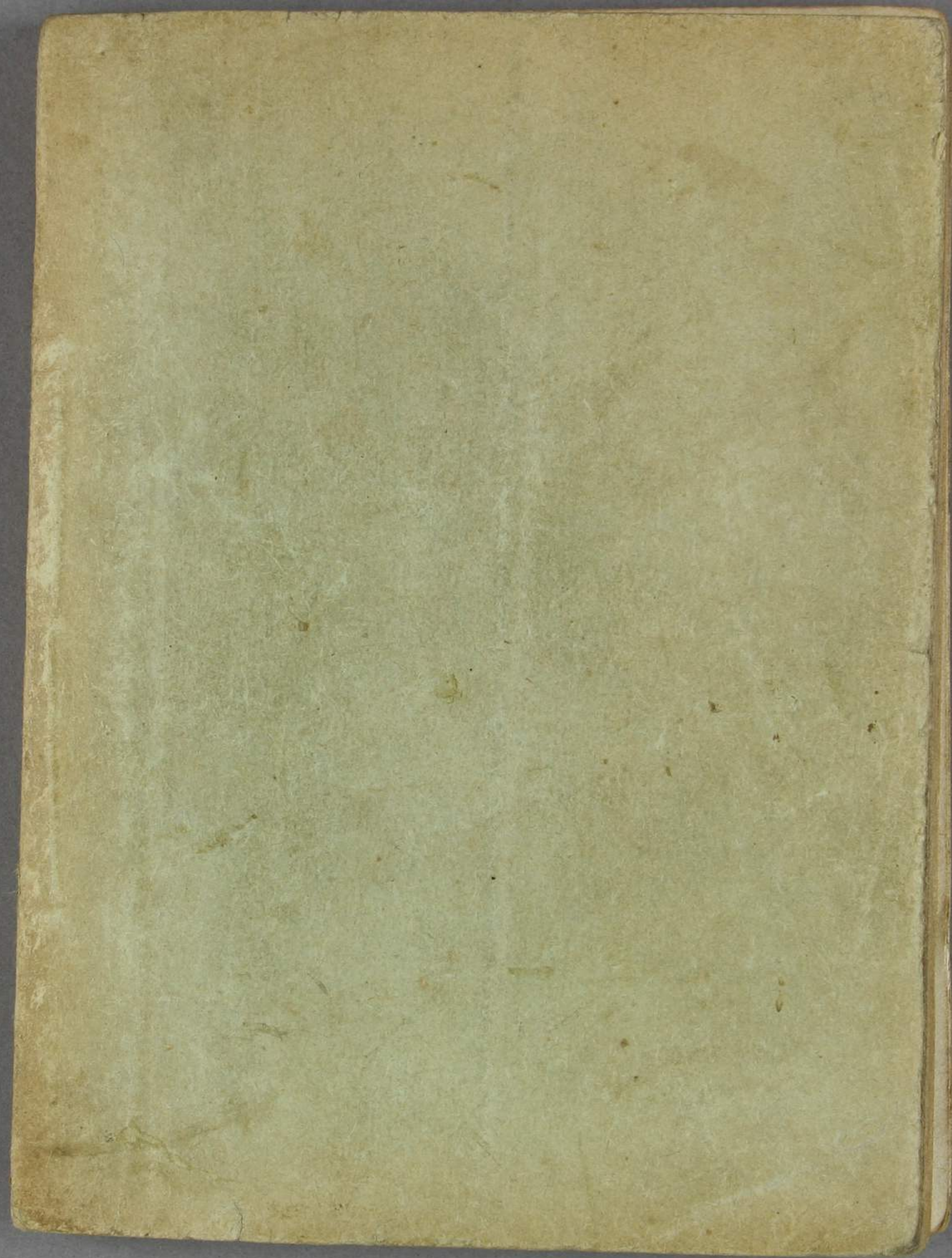
中學書院藏





月  
の  
日







錢幹外數人著

新體  
詩集

月の桂

中學書院藏



目次

春睡……………鐵 幹……………一  
不レ怨レ天不レ尤レ人……………文學士 春のや主人……………三  
東洋半球……………中村秋香……………五  
孝明天皇祭……………東宮侍講 本居豐穎……………八  
離鸞賦……………鐵 幹……………九  
壇の浦……………文科大學教授 物集高見……………二三  
坂本紅蓮堂と話す……………鐵 幹……………二五  
新年鶴……………鈴木重嶺……………二七  
祝言……………文科大學教授文學博士 黒川眞頼……………二八  
藩屏の歌……………華族女學校教授 坂 正臣……………二九



寧樂の都……………奈良縣中學教諭 一柳柳芽……………三〇  
 梅花……………鐵 幹……………三一  
 待春……………飯田武郷……………三三  
 郡歸雁……………中村秋香……………三五  
 王政維新の歌……………文科大學教授 物集高見……………三七  
 勇士の心を……………東宮侍講 本居豐穎……………四〇  
 少女……………鐵 幹……………四一  
 天孫降臨の歌……………華族女學校教授 坂 正臣……………四三  
 賤の屋の月……………第一高等學校教授 落合直文……………四五  
 鎌倉に宿りて……………鐵 幹……………四六  
 僧月照……………中村秋香……………四七

遼東の春……………鐵 幹……………五四  
 思良友……………中村秋香……………五五  
 獨看花歌……………飯田武郷……………五七  
 名所花……………小杉樞邨……………五八  
 保元より承久までの事ども……………  
 ……文科大學教授 物集高見……………六〇  
 四季……………小杉樞邨……………六四  
 今様詩人……………鐵 幹……………六七  
 海軍告別の曲……………華族女學校教授 坂 正臣……………六九  
 學の力……………中村秋香……………七一  
 我が寫眞のうらに……………鐵 幹……………七一



老將軍……………	岡山縣中學教諭	東	洋…………七三
龍王戯……………	……………	鐵	幹…………七五
岡山尋常中學校……………	岡山縣中學教諭	東	洋…………七九
月夜の曲……………	……………	鐵	幹…………八〇
湊川……………	……………	中村秋香…………八三	
四季の夜……………	……………	鐵	幹…………八六
かたみの劔……………	奈良縣中學教諭	一柳柳菴…………八九	
雪月花……………	……………	飯田武郷…………九二	
詩人……………	……………	鐵	幹…………九三
鏡が浦の驟雨……………	……………	渡邊文雄…………九五	
睡驅寛集……………	……………	鐵	幹…………九七

新躰詩集 月の桂

春睡

中學書院編

鐵

幹

握りてねたる鉛筆に、  
蝶々どまるのどけさよ。  
ちさき主人をもち顔の、  
犬もねむりぬ岸の上。



ちよッきの脊をそと撫でる、  
柳のえだのいたづらに、  
むしんの片頬なにをそれ、  
夢には見たかそのえくぼ。

むくりめざめて畫紙の上、  
なかば出來たる橋の杭、  
かかんとすれば暮方の、  
河はいちめん沙がさす。



不<sub>レ</sub>怨<sub>レ</sub>天不<sub>レ</sub>尤<sub>レ</sub>人

文學士 春のや主人

世を思ふ、 まごころの、  
眞清水の、 にごりなき、  
鍛へよや、 心根の、

火燄に焼きて、  
操に浸し、  
日本つるぎを、

頼めたい、 心てふ、  
岩斷つも、 草斬るも、  
そのもとは、 鑛山の、

鍛冶の功、  
劔も鋤も、  
同じくろがぬ、



鍛ふ 假令 折るとも 槌どり  
 幾たび 岩に 刃尖 鍛へや  
 あたりて 又も つるぎ

頼め 鍛冶 怨むな  
 只管 天な 人を  
 心の 尤めそ

人の 我れぞ  
 汚れを 天の  
 拂はん 不足を

補ふ たふとき  
 我れの つとめ  
 あはれ 忘るな

東洋半球

中村 秋香

東洋半球、  
 暴風ふき立つ、  
 空かき陰り、  
 亞細亞の海、

風ますくしまき、  
 雲綻びて、  
 雨きすく強く、  
 龍寄處を失ひ、



海いよ、荒れ、  
林沈みて、

波いよ、高く、  
雞峙とりのりに迷ふ、

鷺は羽うつ、  
獅子はあたま、  
天地にはびこる、  
四百餘洲を、  
一瀉いっしやく千里の、  
大和島根に、

旅順口、  
舟山島、  
大浪は、  
渦卷うずまききて、  
勢するどく、  
寄せ來めり、

あな恐ろしや、

亞細亞の天、

あな危しや、

大和島根、

なごか覺めざる、  
戰勝國の  
復び結ぶ、  
花の木蔭に、  
抒情詩たはぶうたふ、

我が兄弟はらから、  
名に酔ひて、  
桃源の夢、  
蝴蝶を追ひて、  
折なるかは、

なごか立たざる、  
はかなき口説を、  
不二より高く、

我がはらから、  
牆内かきうちにせめきて、  
逆卷きよする、



怒濤の山をも、  
鹿を逐ふべき、  
覺めはらから、

顧みず、  
時なるかは、  
立てよ兄弟、

孝明天皇祭

東宮侍講 本居 豊 穎

むかしのひかり  
高くかゞやく  
後の月の輪  
雲がくれしぞ

今もなほ  
ひがし山  
中ぞらに  
かしこきや

おもへば今日の  
たれか昔を  
おもへば今日の  
誰かみかげを

御まつりに  
志のばざる  
みまつりに  
あふかざる

離鸞賦 快活最可悦

鐵

幹

くらしき火かけに太刀なでて、  
わが泣く夜半の酒の前、



花のおもわに袖あてて、  
賞ひ泣せし人や誰。

戀にはあらず戀ならず。

おなじ學びのまじはりに、

はからず心うちあけし、

それも四とせの昔かや。

男兒二十氣はおどり、

功名の念急にして、

單身ふらり西の方、

膺懲ようちやうの師を追はむとす。

かくと文ふみして告げし時、

御身はいかにのたまへる。

「他人ひとならばいかにあはれよく、  
遂げてもきませ討死を。」

少女をとめの酒に酔ひしれて、

月ゆき花の歌よむも、

甲斐こそなけれ世の中に、  
をのこと生れたまひたる。



柳の枝のながらへて、  
さびしき秋を見むよりは、  
心かろげに散りて行く、  
花のをはりにならひませ。

やよと勧めてやるべきを、

君のみははたいかでさは、

つらくはやらむ世の常の、

人の門出をおくる如。

申すもいと憚れど、  
この御軍に従ひて、  
君が御身に何ばかり、  
譽ありとかおぼすらむ。

血汐のほかに道もなき、

修羅のちまたのたれ中を、

馬にまたがり筒とりて、

仕ふる君にまさばこそ。

雄々しき振の歌まくら、



か△し△この△山△には△た△水△に△  
探△り△ま△さ△む△は△よ△け△れ△ど△も△  
な△が△く△留△り△い△ま△さ△む△や△。

いかでたひらにやすらかに、

とく行きてとく歸りませ、

老いてたよりの親たちも、

待ちたまはむをいかばかり。

こゝにみぢかきひとより一刀よ、

年ごろひめつ玉のほこ籠、

のこるわらはに代りつつ。

添ひまゐらせて願くば、

君が萬里の旅のそら、

成れよ不斷のまもりども。

いかでたひらにやすらかに、

とく行きてとく歸りませ。

かへすくも歌まくら、

探りまさはよけれども、

か△し△この△山△には△た△水△に△



なかく留りいままじや  
一六

とくかへれどの情ある、

御身の詞うれしきも、  
なごかよからぬ留りて、

かしこの山にあること。

師はのたまへりいざ行きぬ、

ためし稀なる御軍を、  
歌に入れむは今の世に、

君ならではた誰かある。

婿なき戀を寫すとて、

紅筆べにふでとるは多けれど、  
有りや、一世をいまして、

人をみちびく丈夫の詩。」

一友はいふ「うらやまし、

市井しせいの塵にあくせくと、  
汗しぼる身にくらべみよ、

異境の旅の苦は物か。



あはれ凡骨いたづらに、  
いくつ築くぞ土饅頭。  
見ずや、偉人のはかりごと、  
屍は馬革、名は青史。」

一友はいふ「おもしろし。」

東亞の風雲しかも急、  
天わが皇のおんために、  
降せり支那の四百州。

丈夫うまれて幾たびか、

この革命の血に遇ふぞ。  
行け、我黨の快男兒、  
腰なる太刀も聲あらむ。」

一友はいふ「いさぎよし。」  
黄金の前にぬかづきて、  
腰を折り、はた、筆を折る、  
人にならばぬ氣高さよ。

渤海の氷、遼陽の雪、  
君が得意の歌よんで、



歸る故國のみやげには、  
待つぞ、江南の梅一枝。」

かくいふ人の多き世に、

御身一人はなどかさば、

とく行きてとく歸れよと、

我に諫めて聞かせたる。

このことわりの聞きたさに、

都を出づる前の日の、

たそがれ時に君が門、

押して叩けばあやにくや、

簾にちらり振袖の、

花の影のみにほはせて、

やがて隠れしその人の、

奥のこゝろを料りかぬ、

梅の花ちる板塀を、

おぼろ月夜の夜もすがら、

めぐりても見つ今日目、

逢ひて語らむよしもやと。



わが船釜山に着きし時。

一封の書は手におちぬ。

詞はなくて中にただ、

書いてこそあれ四句の歌。

「逢はで歸せるますら男よ、

わらはも一目見たかりき。

つらき心もなさけぞと、

知りたまふ日や何日ならむ。」



壇の浦

文科大學教授 物集 高見

思 <small>おも</small> ひ	春 <small>はる</small>	咲 <small>さ</small> き	蹴 <small>け</small> り	鏢 <small>しのぎ</small>	千 <small>ち</small>	艦 <small>と</small> 船 <small>ふね</small>	拂 <small>はら</small> ひ
ぞ	くれ	散 <small>ち</small> る	たて	を	船 <small>ふね</small>	に	も
いづる	がた	波 <small>なみ</small>	挑 <small>いど</small> む	けづる	百 <small>もも</small>	む	あ
元 <small>ぐわん</small> 曆 <small>りやく</small>	の	源 <small>げん</small>	合 <small>あ</small> つ	船 <small>ふね</small>	船 <small>ふね</small>	せ	へ
の	壇 <small>たん</small>	花 <small>はな</small> 妻 <small>づま</small>	源 <small>げん</small>	い	潮 <small>しほ</small>	ぶ	ず
	の	を	平 <small>へい</small>	り	げ	む	振 <small>ふ</small> り
	うら		の	み	む	り	か
	ら		の	だ	む	り	か
			は	れ	り	り	ざ
							す



つるぎの玉 ちる星かぶと  
鎧の袖 をかすめ来て  
飛ぶは角木 かかぶら矢か  
響といろく 朝ぼらけ  
軍よびひに 矢さけびに  
聲を あはせて 逆まくや  
波の底にも かつみえて  
ゆらめく 影も 修羅道の  
切りつ 切られて 敵味方の  
ほどばしる 血の くれなるは  
紅葉 そめなす 龍の宮

こゝは 神垣 瑞垣 の  
久しき 世より 傳へ 来る  
西の 軍の 日にむかふ  
しるし はかなき かねごと を  
今は た 三津 の 蟹なれや  
流れて の 世に といめたる

坂本紅蓮堂と話す

鐵

幹

相逢ふや先づ肩を拊つて、



人○の○眠○り○の○は○が○ゆ○く○て○  
 わ○が○太○刀○ま○た○も○鳴○ら○む○と○す○  
 戀○の○や○つ○れ○の○苦○し○さ○に○  
 君○が○詩○い○か○に○枯○れ○ぬ○ら○む○  
 かけ○醬○油○の○あ○ま○さ○か○な○  
 辛○き○は○浮○世○の○ほ○だ○し○に○て○  
 や○ぶ○れ○布○子○の○あ○た○た○か○く○  
 薄○き○は○人○の○な○さ○け○に○て○  
 こ○の○醉○心○地○下○戸○知○ら○ず○  
 三○升○の○白○馬○ほ○ん○の○り○と○  
 か○ら○く○笑○ふ○繩○暖○籠○  
 なほのれん

都○を○辭○す○る○詩○一○篇○  
 こ○の○袖○に○あ○り○い○で○や○見○よ○  
 語○ら○ひ○ゆ○け○ば○夜○は○更○け○て○  
 瓦○斯○燈○く○ら○し○柳○原○



新年鶴

鈴木重嶺

年○た○つ○今○日○は○富○士○の○嶺○も○  
 霞○む○が○如○く○見○え○に○け○り○  
 人○の○こ○ゝろ○も○う○き○島○の○



原にぞ田鶴も舞ひ遊ぶ。

二八

祝言

文科大学教授  
文學博士

黒川眞頼

十日の雨や五日のかぜ

降れども土をそこなはず。

吹けども枝に音もなき

君が御代こそ樂しけれ。

藩屏ホセキの歌

華族女學校教授

坂

正臣

君の生れ給ひし月、臣も亦生る。君の大君とま  
す日、臣は大臣たり。君の義、臣の忠、相得た  
ること魚と水との如し。君臣心をあはせて國の  
治らんことをはかり、造ミヤツクをたて長オサをおき稻置イナギを  
設く。又山河によりて國縣を分ち、縦横のみち  
に隨ひて邑里ソトモカゲトモを定む。日の經日の緯の名この時  
におこり、背面影面の稱はじめて聞くことを得  
たり。此君の惠、この臣の勳、東西にゆきわた

二九



り南北につらぬく。民に安からぬなく國に穩な  
らぬなきも、中區の藩屏その人を得たるによる  
ならん。あゝ藩屏、藩屏を重んぜらるゝ君臣の  
心、夙く先皇數日の宴の時にあらはる。

寧樂の都

一 柳 柳 葦

青土よし、

奈良の都を來て見れば、

淺茅が原やよもぎが柚、

むかし内裏のあと荒れて、

朱を奪ひしそのかみの、

ゆかりの色やふぢ原の、

榮花のあともかすが山、

神のともし火かげきえて、

名残さびしき夕まぐれ、

遠路ひいきゆく鐘の音に、

あはれを添ふる小男鹿の聲。

梅 花

鐵

幹



和尙をしやういはく、  
 豎子じゆし雜念ざねんを去さッて、  
 眼を閉ぢて物を見よ。  
 耳を掩おほうて聲を聽きけ。  
 玲瓏れいとうとして玉たまか月つきが、  
 一物いっぶつ躍おどつて胸むねに入いらん。  
 啾唳しゅうれいとして笛ふえか簫しょうか、  
 一聲いっせい曳ひいて空そらに在あり。

婆子ばしいはく、  
 若わかいに禪ぜんなごあ休やすなさり。

あう怖こゝろや々々三十棒、  
 あつたら美顔びがんに穴あながあく。  
 それより梅うめの花盛さかり、  
 澁茶しぶちやあ一いっツ召よ上あれ。



待 春

飯 田 武 卿

年としかへり、かへるときけど、  
 山やまのはの、霞かすみもみえず、  
 川かみの瀬せの、氷こおりもとけず、



しら雲の、うへ野の岡は、  
 朝夕の、霜おきかさね、  
 すみだ川、堤の道は、  
 吹く風の、音もはげしく、  
 さむささへ、日にけにませば、  
 埋火の花の、あたりを、  
 しばしだに、はなれもやらず、  
 はなはだも、遠き春ゆる、  
 いたづらに、指のみをりて、  
 日をぞかぞふる、



都歸雁

中 邨 秋 香

結びもはてぬ、  
 夢のゆくへも、  
 花の都の、  
 雲路はるかに、  
 おくれさきだち、  
 あはれ、  
 朧月夜に、  
 雪のふるすに、

故郷の、  
 かつ霞む、  
 朧夜の月、  
 鳴きつれて、  
 かへるかりがね、  
 このなつかしき、  
 心うつさで、  
 いそぐかり金、



あゝ此雁金を、  
ことたてゝ、  
ますらをの、  
花にうかれ、  
月にうたひて、  
なにはの春と、  
夢路にさへも、  
あゝその、  
此かりがねを、  
このかりがねを、

いかにみるらん、  
都にいでし、  
あしたに上野の、  
夕はすだの、  
ふる郷は、  
うたゝねの、  
ゆきゝたへにし、  
ますらをのとも、  
あはれ、

王政維新の歌

文科大學教授 物集 高見

雪に螢にゆき ほたる  
書の林によみ はやし  
こもりの培塿つむし  
莠搔きやるはくさか  
山田守る男のやまた  
思ひやかけしおも  
煙はらみてけぶり

むつびつゝ、  
木かくれて  
つむくゝと  
膠のやいばた  
ながめには  
海の原わた はら

くろふねの



いたぶる浪音  
響つたはる  
田廬をうづむ

嵐の上あらしうへに  
えさらぬ道みちに  
夷えみしきたむと  
飛火とびひはほでる  
かごとばかりの  
うたてうてたる

轟とつろけば  
櫻田さくらたの  
花はなふいき

そいろきて  
こにしきの  
周防すほうなる  
鹿兒島かごしまの  
弄槍ぼつゆみに  
武藏むさし鎧よろい

かけみかけずみ  
三葉葵みつばあひむぎを  
内外うちとにかこつ  
あふささきるさに  
小野をのの炭すすみがま  
鳥羽とばに伏見ふしに  
ころもは生おふる  
水曲みづまにふする  
流れはぶれて  
落つる懸子かけこのの

ふたしへに  
かづらきて  
人をおほみ  
つまづきの  
くゆればか  
椎柴しほしばの  
竹芝たけしばや  
うへ野のさへ  
箱館はこたてに  
をさまれば



戸<sup>と</sup>ぎぬ御代を  
千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>田<sup>た</sup>に呼<sup>よ</sup>ばふ  
千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>十<sup>と</sup>返<sup>かへり</sup>を  
萩<sup>まつはと</sup>茶<sup>は</sup>ひさに  
いはへ益<sup>ます</sup>人<sup>ひと</sup>  
ちはんものぞ

浦<sup>うら</sup>安<sup>やす</sup>と  
葦<sup>あし</sup>田<sup>た</sup>鶴<sup>つ</sup>の  
松<sup>まつ</sup>ヶ枝<sup>え</sup>に  
巢<sup>す</sup>ごもりて  
ますくくに  
言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>はし

勇士の心を

東宮侍講 本居豊穎

額<sup>かぶ</sup>に痛<sup>いた</sup>手<sup>て</sup>はちはん負<sup>お</sup>へ

むかふ野<sup>の</sup>山<sup>の</sup>の露<sup>の</sup>よりも  
そ<sup>そ</sup>び<sup>び</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>見<sup>み</sup>せ<sup>せ</sup>じ<sup>じ</sup>君<sup>きみ</sup>が<sup>が</sup>爲<sup>ため</sup>  
命<sup>いのち</sup>は<sup>は</sup>か<sup>か</sup>ろ<sup>ろ</sup>し<sup>し</sup>名<sup>な</sup>は<sup>は</sup>ち<sup>ち</sup>も<sup>も</sup>し

少女

鐵

幹

ま<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>繪<sup>え</sup>の<sup>の</sup>硯<sup>えん</sup>な<sup>な</sup>かな<sup>かな</sup>ら<sup>ら</sup>で、  
蓋<sup>ふた</sup>を<sup>を</sup>貸<sup>か</sup>して<sup>して</sup>と<sup>と</sup>妹<sup>いもうと</sup>の、  
乞<sup>こ</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>が<sup>が</sup>て<sup>て</sup>與<sup>よ</sup>へ<sup>へ</sup>し<sup>し</sup>が、  
返<sup>かへ</sup>さ<sup>さ</sup>ず<sup>ず</sup>なり<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に。



蓋はど問へば蓋は猶、  
貸して給へとうつむけり。  
母のかたみのすいり箱、  
そこなはれなば何とせむ。

ある日ひそかに渠が居間、  
のぞいて見れば眞白なる、  
片頬を見せてすやすやと、  
春のひる寝の罪なさと。

蓋にはみごと赤白の、  
花をむしって積上げて、  
花の底にはひとひらの、  
母の寫眞ぞ埋みたる。

天孫降臨の歌

華族女學校教授 坂 正 臣

豊葦原風なきに戦さ  
秋津洲濤無きに轟く  
然らしむる者は何ぞ禍津神



速にしづめ平げてわが皇孫を降すべし  
來れ勇士健甕槌之神  
朕汝にこの大事を託せむ  
健甕槌謹んで天祖の勅を奉け  
師の靈を揮ひて到る處に戦ふ  
坂の尾毎に追伏せ河の瀬毎に追拂ひ  
幾ばくも經ずして天の下清まりぬ』

天の下清まりぬわが皇孫  
行きてしろしめせ天之日嗣を  
その隆えまさんことは天地と共に窮無かるべ

しと  
たからの御鏡をとりてかたみとして授け給ひぬ  
嗚呼天祖の御詞鏡に映る影のごとく今にいたり  
て眞さやかに仰ぐ一系の君』

賤が屋の月

第一高等學校教授 落合直文

高き臺に眺めをる  
人をば人はうらやめど  
あれたる庭の軒端にも



さやかに照れり月の影。

鎌倉に宿りて

鐵

幹

いまさら、  
誰の夢をかちどろかす。  
かまくら山の入あひの鐘。

こころ誰が、

花のやしきの跡ならむ。  
苗代小田に蛙なくなり。

僧月照

中村秋香

根こして遠く、移し植ゑし、難波の梅の、冬こ  
もり、霜にほゝるみ、嵐にきほふる、操を志ばし、  
花園の、雪にやしなふ、清水寺、

今を春べと、都をば、霞と共に、たつか杖、つ



き日重ねて、旅ごろも、ひもゆうづゝの、西ま  
た東、かゆきかくゆき、國々の、有さま姿勢、  
人情探り究めて、またさらに、歸るや袖の、秋  
の風、」

春の光の、長閑なる、庵はやがて、名のみして  
祈禱にことよせ、志士に交り、歌にかこつけ、  
公卿にいでいり、食を断ちて、心を盡す、攘夷  
の祈、眠を忘れて、誠を寫す、阿字の經、しづ  
心なく、散りしく花は、皇國を思ふ、敷島の、  
大和心の、山櫻、」

清水山の、木隠れに鳴く郭公、しのびねは、や  
がてさやかに、久方の、雲井にもれて、はから  
ずも、身におほけなくかづくなる、真澄の鏡高  
麗劍、鏡の如く、明らかに、劍の如く、厳しく  
も、皇國の光、輝かさんと、またも高野の山ご  
もり、心をこらし、思を潜め、晝はひぐらし、  
夜はよもすがら、血に泣く、真言秘密の法、」

賜ひし御衣、ゆたかなる、袂にあまる、惶さは、  
包みもあへず、しのぶずり、しのべる事と、も



ろともにも、世に泄れにけり、いざさらば、しばし伏見の浪枕、(一)難波の蘆の障をさけて、猶世の爲めに、みを盡さんと、曉寒き、長月の在明の月の、(二)追風に、箭を射る如く、行く舟の、はやくもつきぬ、下の關、」

ふりみふらずみ、定めなき、時雨にぬるゝ、旅衣、ひるまは潜み、夜はたどる、心づくしの博多の港、赤間が關を、吹こゆる、あらしま風、の、未<sup>ま</sup>返へて、夢安からぬ、竹の内、うきふしまげき、よをこめて、棹さしくだす、筑後

川、」

まだふり馴れぬ、すゝかけの、袖ふきはらふ、よはの風、市來の關を、こえかねて、空しくかへる沖津波、照らす夕日の、影落ちて、よはぬば玉の、黒の濱、鹿兒島あらし、吹しまき、おき處なき、露の身に、宿る御舟の蓬とよの月、」

影は凄し、海原に照る月、肌は寒し、浪の上を吹く風、月やあらぬ、否、月は昔の月、風やあらぬ、いな、風は昨日の風、茫々たる天津みそ



ら。渺々たる青海原、いかなればわれらが身にはせまき、何なればわれらが身をば容れざる、神も下れる世は捨つるや、佛も末の世は守らずや、(三)あはれ大君の、ためには何か、をしむべき、あはれわが國の、爲めにはいかでいとうべき、」

腸の斷つ慷慨悲憤の聲、」

沖の波間に月落ちて、(四)薩摩の瀬戸の波むせぶ、」

あはれ、い、い、ゆきかふ道も、たえはて、い、降

りつもるよの、雪の内に、梢はくだけ、根は枯れし、難波の梅よ、霜を凌ぎ、嵐に堪へて、くづほれぬ、清き操はのどかなる、此大御代の、春にあひて、咲くや此花、千代かけて、散ることしらず、かぐはしく、」

○月照の歌

(一)「浪花江やあしのさはりは繁くともなほ世のために身をつくしてん」

(二)「追風に箭を射る如く行く舟のはやくもこころを果してかな」

(三)「大君のためには何か惜しからん薩摩の瀬戸に身はこづむさも」



(四)「くもりなき心の月さもるともにおきの波間にやがて入りぬる」

遼東の春

鐵

幹

形見の上着、血だらけの、  
かくし探れば鉛筆に、  
「遼東の春、美代子どの、  
兄より」とある紙づゝみ。  
中にはなかば萎みたる、

すみれ、たんぽい、一にぎり。  
辭世の句かや、みじかくも、  
「土饅頭、せめては花の、咲きどころ。」

思良友

中 邨 秋 香

おなじ机に文よみかはし、  
一つ硯に墨すりあひて、  
學の窓の日暮さらず、  
睦びし友よあはれ其友、



嬉うれしき事ことも亦またうきふしも、  
共ともに語かたみらひ交かたみにつげて、

力ちからともなられもしつゝ、

こゝら數多あまたの年月もへぬ、

あはれ其友しほし暫しばしと云ひて、

立別たちわかれしはこそこの此月、

三月過たのきて歸りこなむと、

頼たのめしものをあはれ其友、



獨看花歌

飯田武郷

花みつゝ、

さけのみて、

かたるべき、

うちつけに、

よしやその、

おもふこと、

かたらずば、

友なきに、

酒はのむとも、

花はみるとも、

友しなければ、

さびしからまし、

友はありとも、

こゝろあはせて、

たのしからめや、

あにまさらめや、



すみだ川、  
さきにほふ、  
みなひとの、  
さそふべき、  
われはけふ、  
花の木かげに、

つゝみのさくら、  
花のさかりと、  
かたるをきして、  
友はあれども、  
ひとりぞきたる、

名所花

小杉 榎 郵

いにしへを、

しのぶの岡、

かきながす、  
きのふけふ、  
岡でしの、  
かはかぜの、  
いかさまに、  
志のぶの岡、  
あらしにも、  
きのふけふ、  
咲きてにほふ花、

墨田のつゝみ、  
咲きてにほふ花、  
あらし吹きなば、  
雨さそひなば、  
ちりかみだれむ、  
墨田のつゝみ、  
雨にもあてじ、  
さきのさかりに、



保元より承久までの事ども

文科大學教授 物集 高見

産女うぶめがうめく

疼いびきあさふる

すいろがましく

御み倚い子しうごかす

明あ日すやはひくと

牙さ噛かめばきしる

同おなじわだちを

兒食ちをばみの

おしからに

高座たかくらの

うさゆづる

弓ゆみどりの

小車こぐるまの

引馬野ひくまのは

旅たびのしるしに

熊野くまの詣まうでが

杖つえにうたるゝ

いりみだれ

金剛こんがうの

六部ろくぶ一いち

稻荷いなりの杉すぎは

棕むくにのみつく

黒くろきかしらを

紅あかき禿かぶろの

しふるしひなの

たのみすくなき

頭挿かざりせども

小鳥こからすは

つゝみ井いの

よこいとに

否いなも諾せも

秋篠あきしのの



篠屋は笹の  
駒をとめたる  
琴柱にむせぶ  
しめりがちなる

隅なれや  
かくれがの  
つまおとも  
鹿が谷」

鬼界が島に  
みるめを宇治の  
ひきておしでを  
憂き瀬をわたる  
ひそむ空穂の  
木曾路におこる

はなたれて  
ひきめくり  
とりしもの  
石橋に  
鳩ふけば  
比叡おろし」

しどみふせかぬ  
あはれのみゆく  
生田の梅も  
須磨に吹きなす  
笛は青葉か  
くぬりもこよふ

六波羅は  
一の谷  
ちりたりと  
總角の  
蛇逃か  
檀の浦」

龍の顯は  
蟻通なる  
三つの鱗の

掠へども  
鎌倉の  
いらめけば



珠たまはもぬけて  
八幡やわたにひろふ

七曲ななまがらの  
落髪おちかみも

たゝなはりたる

いしだゝみ

疊たためばすぼむ

かはほりの

末ひらは廣げぬ

しづめをり」

四季

小杉 楳 郵

春

かどの松ふく春風に、

軒端のきばの梅もかをるなり、  
籬かきの竹のうくひすは、  
百よろこびをなのりして。

夏

花の春邊のひがし山、  
梢こぎえにいとふあらし山、  
柳青葉のかもがはや、  
匂ふか月のかつら川。

秋

いたづらぶしに見出せば、  
こよひの月もさし出たり、



かきぬのむしもふり出たり、  
つま琴いざとれ笛吹かむ。

同

人のこゝろあき風に、  
その言の葉もかるゝなり、  
ひとりふすまの手枕に、  
しめりそへ行くかりなきて、

冬

ふけしづまりし冬の夜に、  
むろの松風おとすなり、  
その梅の香もかをるなり、

猿戸たゝくかむらしぐれ。

今様詩人

鐵

幹

慾には飽きたく名は欲しく、  
胸に焚く火を狂熱と、  
だれがつけたか程のよ。。

慾も難けりや名も難く、  
苦しませれのやけ腹を、



不平といふがかわいいな。

せめてひと月百兩の、  
くらしもさせてラブとやら、  
すきな人にも逢はせたら。

それよさッぱり姿態も氣も、  
寛潤伊達のおとなしき、  
世の粹様であらうもの。

あたら男をだいなしに、

生れもつかぬ崎形見の、  
蝶や董で朽ちさせる。



海軍告別の曲

坂正臣

第一

酒を勧めて手を握りつ  
語る詞もはてしなや  
さらば別れんますらをの  
國の爲とて船出する



海はたゞみの上ぞかし  
波の如くに立歸れ

第三

山の姿も人影も  
消えて空しきわたの原  
磁石ひとつを憑にて  
おもふ湊へゆくふねの  
黒き煙ともろとも  
こゝろや跡に残るらん

學の力

中村秋香

天を動かし、地をくだき、既往を考へ、未來を  
知る、學のちからぞ、あやしきや、

國を平らげ、世をしづめ、心をおさめ、身を立  
てしむ、學の力ぞ、くすしきや、

わが寫眞のうち

鐵

幹



髭がなければ威がなくて、  
口を利かねば野暮ぢやげな。  
あのひよつとこの面をきて、  
いッそあるこか晝ひなか。

五〇躰〇そろ〇う〇て〇あ〇り〇な〇が〇ら〇、  
世〇に〇う〇た〇よ〇み〇の〇す〇た〇れ〇も〇の〇。  
こ〇の〇骨〇一〇つ〇せ〇め〇て〇た〇い〇、  
横〇町〇の〇犬〇に〇く〇れ〇て〇や〇ろ〇。



老將軍

東

洋

三尺の劍抜きもてば  
垂氷の光身も寒し  
神に請ひ禱み山刺せば  
たばしる泉湧き出でぬ  
梓の眞弓我がひけば  
心にかゝれり三日の月  
雲のあなたになりかぶら  
なりの響に雁鳴きぬ



君の御爲と國のため  
家路離りて幾年か  
敵守る砦に旅寐して  
かゝるも憂しや老の波  
よる年波に緋威の  
赤き心はかはらぬど  
今はた白しとりよろふ  
鎧の袖に霜おきて

あはれと見るやこれの駒

韃をきて我を乗せて  
千里ゆきかひ諸共に  
いくさの場に老ひにけり  
しかはあれども歩め駒  
今ぞ歸らん故郷へ  
水かひたりしいにしへの  
清き野川はあせやせし



龍王戯



七月三十一日の夜、瀛船舞子丸に乗って、玄海灘を過ぐ風波大いに荒れ、わが上等室の窓に注ぐ三四回。窓下にありし稿本、悉く濡ひ、鉛筆の字痕、半ば洗ひ去らる。因て戯に古鉢の龍王戯篇を作る。

千千の真玉を積まばとて、  
我歌如何に換へられん。  
寶ほしがる海神の、  
求め給ふもことわりや。

玄海灘に風さはぎ、  
船は木の葉と漂ひぬ。

狂ひ荒ぶる大浪の、  
窓を破るも幾そたび。

曉がたにながむれば、  
反古に書きたる枕邊の、  
歌は皆がら洗はれて、  
何處の渦に捲かれけん。

光まばゆき龍宮の、  
珊瑚の宮の奥殿に、  
いつかれ給ふ姫君の、



薫る御手にや載せられし。

鉄もつ蟹、槍とる魚、  
うろくづども打護る、  
寶の庫の誰知らぬ、  
玉の匣にや秘められし。

塵の浮世に知られぬば、  
ありて甲斐なき我歌を、  
千尋の海の底ふかく、  
もて行かれたる嬉しさよ。

岡山尋常中學校

東洋小史

古松風清みて天主閣高く

旭江月を浮べて城壁白し。

つらねたり二十教室古壘の上

こゝなりな新築岡山尋常中學校』

あゝいにへの中納言には少將に

經營慘憺のあと見えて



吉備津路の健兒六百

高きに仰ぎて雲に嘯けり』

月夜の曲

鐵

幹

風きよく、  
月あかき、  
あかし瀉、  
松あをく、  
波しろき、  
須磨の浦。

須磨の浦、あかし瀉。

人、や誰れ、  
夜もすがら、  
をちかへり笙を吹く。  
影はなし、  
磯づたひ、  
ただ笙の音ばかり。

松間の風を尋ねては、  
枝をわたりて又くだり。



波間の月を探りては、  
水をくぐりて又うかぶ。

吹く風いよよ澄みゆけば、  
笙の音いよよ澄みまさり。  
てる月いよよ牙えゆけば、  
笙の音いよよ牙えまさる。

風たちて、  
月は入る、  
あけがたの引き汐に、

笙の音は、  
沖のかた、  
うす霧に消えて行く。

湊川

中 邨 秋 香

海はたちまち陸となり。  
舳艫をつらぬる七千艘。  
陸は須磨より鶺越。  
野山にあまる二十萬。



たがひに合はする関とがの聲。  
三百里外にひいき渡り。

天柱碎けて、地軸は挫く。

必死を究めし七百餘騎。

雲霞の敵をひづめの塵。

縦横無碍むがにかけちらし。

七合七離はすいけのつゝみ。

敵はあらての數千騎。

入かへく攻めたつる。

色もかはらぬ菊水の一むれ。

追つかへしつ龍翔虎跳。

火花をちらす十六劇戰。

南風競はず湊川。

ア、ア、ア、ア、。

『七たび人間に生れきて、

朝敵退治』ことばの下。

一族股肱の七十三騎。

ほのほの烟ときえにけり。

\* \* \* \* \*



ア、ア、ア、ア、。

君が盡し、其真心は。

君がとりし其みさをは。

天つ日影の照さむきはみ。

わが國民のあらむかぎり。

人の鑑と明けく。

世をこそてらせ御靈代。

四季の夜

鐵

幹

春夜

ここも花見の供部屋に、

徳利倒れて下郎寝ぬ、

物の音やみし奥庭に、

まよんぼり霞む捨篝。

夏夜

馬には草を母が飼ふ。

お前はわらぢちやと脱いで、

それ行水かすんだなら、

すきな索麩も冷えてある。

秋夜



萩の花ちる山寺の、  
本堂荒れて月ぞ洩る、  
村の若い衆が五六人、  
百物語ふけにけり。

冬夜

按摩上下五百文、  
聲より人の影たえて、  
辻の柳に一だいの、  
人力のこる寒さかな。



### かたみの劔

奈良縣尋常中學校 一 柳 柳 算

みさかのつるぎ	ぬき持てば、
ひかり身にしむ	あきのしも、
ふるき御代より	つたへ來し、
いへのたからの	此のつるぎ、
血しほにさびし	あと見ても、
ちゝのいさをぞ	あふがるゝ。
をさまる御代の	すべをなみ、
とがでをさむる	身ぞつらき、



あはれむらくも  
ちるはなさをふ

立てよかし、  
かぜも吹け。

からやまあらし  
われも來にけり  
いくさのにはの  
こしにとり佩く  
ちゝの御たまも  
抜きてもすゝむ  
なびかぬ草木も  
きみがみため

吹きすすび、  
此のたび路、  
おもしろや、  
つるぎには、  
こもりたり、  
ひかりには、  
なかるらむ。  
すゝむわれ、

つるぎととも  
いへのほまれを

たふれなむ、  
身におひて。

かざれるとこの  
むかしのさまに  
逝きにしひとの  
またもかたみと  
血しほのさびも  
くにつくしゝ  
ほまれととも  
あはれかた身の

つるぎ太刀、  
かはらぬど、  
かげはなく、  
なりにけり。  
さらにまた、  
ますらをの、  
まさりけり。  
つるぎ見ば、



あひつぐ孫子も  
こゝろして、  
やまとごころを  
みがくべし。



雪月花

飯田武郷

上野の岡のはるの花、  
隅田かはらの秋の月、  
眺むるそのまに明けくれて、  
我身は雪とぞふりにける。



詩人

鐵

幹

戀になやめる人は聽け、  
われ夏山のほととぎす、  
さつきの空のはれやらで、  
深きおもひに沈むとき、  
千こゑ悶えて血をば吐く。

世をいきどほる人は聽け、  
われ深林しむりんの獅子の王、



巖いははに風の雲荒れて。  
 もゆる歎きに堪へぬとき、  
 入こそ怒りて山を裂く。  
 道をもとむる人は聽け、  
 われ上峰じやうほうに栖む鶴の、  
 松間のあらし露ふけて、  
 夜半の浮雲くだるとき、  
 一こそ高く月に喚ぶ。



鏡が浦の驟雨

渡邊 文雄

雲よせきたる  
 伊豫いよがたけより  
 窓まどにむき立つ  
 沖合おきあひちかき  
 奈落ならくの底に  
 かげかきけされて  
 鳴神なるかみはげしく

雲よせきたる  
 くも寄せきたる  
 しろ山も  
 二つの島も  
 たちまちに  
 しづめるごとに



ゆふだちきたれり

雲はれ行きぬ

くもはれゆきぬ

月かげは

木立こたちの繁しげみを

あらはして

波間に玉ちる

けしき見せつゝ

かがみが浦にも

うつりてすゝし



雲はれ行きぬ

天城あまぎのみねの

大空出でたる

山また岡の

水天わかちて

驅睡魔集

梟

鐵

幹

せめて成るなら、晝ひなか、  
空に氣高い鶴になる。  
鶴になれずば、ええままよ、  
すねて闇夜のひとりもの。

うぐひすさんや頬白ほはしろさん、  
錦の籠に、姫さまの、



摺餌に飽いて歌よんで、  
それで主たちや無事である。

九八

世にきらわれて仕合の、  
おいらは結句山がよい。  
星を懸けたる眼もあれば、  
鷹を蹴飛す爪もある。  
そつと夜半に羽音もさせず、  
阿呆雅の巢の側へ。  
笑止や盲目の寐惚けて、  
何を噪くぞ、がやがやと。

月夜

情しらずか、盲目か、君は、  
なぜに泣かぬぞ、此月に。  
國にや子もあろ、妻もあろ、  
甘きはせぬかえ、其胸が、

涙の種のないならば、  
わざとも泣けよ、月の前。  
えい、云ふ内に、すやすやと、  
君は寐るのか、情のない、

九九



情がないなら友がない、  
友がないなら職業がない。  
道理で君は四十面さげて、  
知らぬ他國で苦勞する。

## 零丁孤苦

歌よ酒よと惚けちやゐれど、  
思ひ出しては行燈にそむき、  
ひとり泣く夜のないでない。

故郷百里の片山里に、  
父は七十、妹は十四、

こころ細かる、わびずまひ。

一生不孝に泣かせた母は、  
おちる木の葉がせめての手向、  
だれもはらはぬ墓の下、

## 鎌倉の僧房を出づる前夜の作

たゞ黙念の小夜ふけて、  
杉の葉に聽く、雨の音。  
ひとり頼れる立膝に、  
痛たや藪蚊の三つ二つ。



嫌ひでもなし、世の中が。  
憎いでもなし、人の子が。  
さても今更山寺やまでらに、  
何をしてゐた、小半月こはんげつ。

子規

人があるかや、聞知る程の。  
何にするぞえ、血かなあみに泣いて。  
あはれ小籠の金網かなあみに、  
もんどり打つべき身でもない。  
月にひと聲都をはなれ、  
またも野山に西ひがし。

〔大尾〕

明治三十一年六月一日印刷  
明治三十一年六月五日發行

定價金拾五錢

發行兼編輯者

高橋茂三郎  
東京市麴町區富士見  
町五丁目二十二番地

印刷者

島保藏  
東京市京橋區西紺屋  
町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍  
東京市京橋區西紺屋  
町廿六七番地

發行所

中學書院  
東京市麴町區富士見  
町五丁目二十二番地





謹告

本誌は中學生諸君が最良の師友たる目的を以て出版せる全國唯一の中學雜誌にして、毎號一萬部の多きに上りぬ。これ偏に讀者諸君の厚眷の致す所、謝するに辭なし。本社は益嚴正忠實の筆を振ひ、謝するに發刊の主旨を貫徹せん。本誌は徒に世の通常雜誌の如く諸君の娛樂にのみ供するを好まず、清逸の情操を養ひ高雅の趣味を與へんことを務む。半は講議録に高擲する類は雜誌、半は其記述は一讀直に拋擲する類にあらざりて、永遠保存すべき價值の事項を列載せり。毎年末を以て壹卷結了とし、之を分本せば、(一)本領、文學、(二)英文、(三)數學、理科、地理、歴史、(五)群芳、(六)付録の六冊に區別して、各報、(五)群芳、(六)付録の六冊に區別して、各

部完全の書籍に綴るとを得べし。以上本誌の特色なり。今回『中學新誌社』を擴張して『中學教育社』と改め種々の編著を企て、更に中學書院を設けて之が發賣に與からしむ。

中學新誌第貳卷第五號目次

寫眞石版、僧月性の筆蹟  
〔本領〕愛校心 岐阜尋常中學校長理學士 主筆  
立志論 故文學博士  
〔文學〕座、旅文評釋  
嘲、佛骨表、  
王政維新の歌(新詩) 文科大學教授  
不、怨、天、不、尤、人(新詩) 文學士  
東洋半球(新詩) 文學士  
獨看花歌(長歌)  
名所花(長歌)

淺井郁太郎 狩野晶山 川本其角 榎本高見 物集や 春の主人 中村武香 飯田秋香 小杉榎



英文英語を修めんとするもの心得

藤の色々 文科大學英文科學生

西洋文學者逸話 文科大學々々生

朗詠集(五) 文語粹金(春景)(忠烈) 在文科大學

前赤壁の賦英譯 單複の數

會話(散步の條) 春の四首英譯 和文英譯

西諺集 梅雨中見舞の文、同返事

「數學理科」根數方程式解法の注意 陸軍教授

迷ひ易き算術問題 理科大學々々生

△製法百種 「地理歴史」春の光 文科大學哲學科學生

泰西立志談 近世名士逸話 法科大學々々生

△年號の讀方 「讀書案内」英語字書十數種

「遊學案内」遊學者坐右銘

楯圓城峰

高橋

碧雲生

敏生

同

野田淡堂

中村孝

中學生諸君に告ぐ 東京商船學校長海軍大佐 平山藤次郎

「雜錄」海國男兒に對する海軍男兒の希望 海軍大佐 肝付兼行

現今の新聞紙 中學世界(大學士) △一語千金 在文科大學

「雜報」落葉片々 懸賞文披露(中學新誌を讀む)

「附錄」英語異同辨 每月壹回一日發行、壹冊定價金拾錢、六冊定價金五拾四錢、拾貳冊金九拾六錢、外に郵税金壹錢宛、郵券代用壹割増

# 普通讀書案内

全壹冊 近刊

日々の新聞紙上、新著の出版、古書の翻刻を以て廣告の大半を塞ぐ、汗牛充棟とは實に今日の有様を指すならん。それ學問の



要は書物の選擇にあり。尙一層困難なるは、如何なる順序に  
 りて、如何なる書物を讀むべきかにあり。撰擇の不適當次第の  
 不順序は時間を徒費し精神を徒勞せしむ。本書はこれ等の必用  
 を充たさんために、普通學科の順序に分類し、易より難に及ぼ  
 して、書籍の批評紹介をなし、卷數定價發行等も詳記せり。學  
 生諸君一本を座右に備へば其便益多からん。

新選 遊學案内

全壹冊 近刊

本書の必要なるは今更ら説くを要せず。仿間二三の編者あり  
 雖漫然學校の規則を雜記せるに過ぎず、本書は秩序的に之が分  
 類を爲し、目的地に達せんには如何なる豫備校に入り幾年を分  
 て何れに進むべきかを詳述し官公私立學校の規則の要領を摘み  
 其學風等を嚴正に批評せり。眞に遊學者の案内たるに背かず。

中學 作文叢書

每月一冊發行、六冊  
 完成、壹冊定價金貳  
 拾錢、六冊前金壹圓  
 郵稅壹冊金四錢

第壹篇 文語粹金

卷の上 中學教育社編  
 六月發行

第貳篇 文語粹金

卷の下 中學教育社編

第參篇 一言千金

英文格言集附  
 中學教育社編

第四篇 文章評釋

文科大學々生著

第五篇 修辭學

文科大學々生著



第六篇未定。これを要するに本書は作文資料の尤も完全せるも  
のにして學生諸君この叢書を座右に備へ玉へば文を作るこゝ自  
由自在なりとす。

編輯所 中學教育社

發行所 中學書院

新古書院編輯部  
東京市本郷二丁目  
古本柳井ノ節柳報次第上精々買入申候

伊藤